

連弾に 磨きをかける 指導



© 相田憲克

1台のピアノとピアニストが2人いれば、すぐにアンサンブルが楽しめる。それが連弾の醍醐味ですよね。

先生と生徒さん、生徒さん同士、時には先生方お2人で、と様々な組み合わせでできますが、「さっそく始めましょう」と楽譜をそろえたものの・

「どちらがプリモ、セコンドを弾くの？」

「ペダルはどうする？」

「どんなふうに練習を進めるの？」

「指の位置は？」

「出だしのタイミングの合わせ方は？」

・・・??

疑問が次々と湧いてくるに違いありません。

ピアノデュオ ドゥオール (藤井隆史&白水芳枝)

2004年にドイツにて結成後、国内外で活発な演奏活動を展開し、高い評価と注目を集めている。藤井隆史は、東京藝術大学付属高校、同大学を経て同大学院修了。現在、東京藝術大学及び武蔵野音楽大学非常勤講師。白水芳枝は、兵庫県立西宮高校音楽科、東京藝術大学卒業。現在、国立音楽大学、共立女子大学非常勤講師。藤井は文化庁、白水は野村国際文化財団、またデュオではDAADの奨学生としてドイツ・マンハイム音楽大学大学院に共に学び、ソロ課程及びピアノデュオ科を最優秀修了。各々ソリストとして国内外にて数々のコンクールに入賞。ピアノデュオでもロンドン、青山財団バロックザール賞、シューベルト、M.ドラノフなど国際的賞を受賞。デビューアルバム「ドゥオール」はレコード芸術にて特選盤に選出される。

連弾は、アンサンブルではありませんが2人で1台の楽器を共有しますので、出てくる音はもちろん、ピアノの音だけです。

ヴァイオリン+ピアノ、フルート+ピアノのように、違う楽器の音の重なり合いではありませんから、ソロ以上にそれぞれの奏者に幅広い多彩な音が求められますし、音色、そしてそれを生み出す指のタッチにこだわりながら、さらに連弾の一番の課題である“ズレ”とも向き合わなければいけません。

とはいっても、ズレばかり気にすることなく、時にはそれぞれの持ち味を活かすなど、音楽を“生きたもの”として表現していきたいですね。

初めて連弾をするペアの場合はまず、お互いの音にじっくりと耳を澄ますことのできる、テクニク的にも余裕のある曲から始めてみましょう。

それぞれどのようなタッチで弾いているか（シャープな音質が求められるときには指先をしますし、指の腹を使うのなら音質は柔らかく、ゆったりとしますね）をよく観察し、相手がどんな呼吸をしているかを隣で感じながら、互いの間やタイミングの取り方を確認し合い、その上で、曲のイメージや細かな表情、それらの表現方法についてしっかり話し合うことが必要となります。

この“話し合い”がアンサンブルにおいては非常に大切です。イメー

ジを相手に伝えようと努力すること、改めて自分の表現したいことが明確になり、時には新たな気づきを得ることもあります。

仲良し同士でも、「音を聴けば相手は分かってくれるはず」という過信は、この際捨てましょう！

どちらがプリモ、 どちらがセコンド

可能なら、譜読みの段階でまず2人で合わせ、お互いに両方のパートを弾いてみてから、プリモとセコンドを決めましょう。それぞれの持っている音色が、プリモ、セコンド、いずれかのイメージにぴったり合うこともありますし、弾きやすさも選択の決め手になるでしょう。

また、各々の性格から考えて、歌うのが好き、目立つのが好きだからプリモ、縁の下の力持的の役割が好きだからセコンド、というように決めても良いですね。

ペダルは どうするの

連弾では奏者が2人になってもピアノのペダルが増えるわけではありませんね。特に決まりはないので、踏みやすい方が踏む、というのでも良いと思います。

ただし、曲中での交替は、例えば、本番のドレス着用時に裾を踏んでしまったり、交替するタイミングがず

れたり、思わぬハプニングに見舞われることもありますので、避けたほうが良いでしょう。あくまでも、連弾のペダルは2人のためのペダルであり、2人の耳で踏む、ということはお忘れなく。

私たちの場合はセコンドがペダルを受け持ちます。音楽の重要な要素のひとつ「和声」を支えるバスを担っているのは、セコンドの左手ですので、ペダルはバスのラインに合わせて踏み替えるべきとの考えからそのようにしています。

バスが聴こえるようになると、デュオから離れてソロや伴奏を弾くときにも、常に和声感を感じながら弾けるようになりますよ。

どんなふうに 練習を進めるの

プリモ、セコンドを決めたら、個別にしっかり練習しましょう。一緒に音楽を作っていくのですから、個々のパートに責任を持つ必要があります！この責任感が生徒さんをより成長させてくれるはずですよ。その2人でなくては作れない音楽が、連弾なのですから！

相手の音楽に耳を傾けられる余裕ができてきたら、再び合わせてみます。それまで聴こえなかった隠れた旋律やハーモニーの美しさに気づかされるでしょう。

具体的な練習方法としては、例え

ば、バランスを考えながら、「①バスとメロディーのみ」「②内声のみ」「③バスと内声」などを2人で合わせ、最終的には4声それぞれに役割、方向性を持たせながらも、お互いが支え合い、尊重し合いながらきちんと層になり、1つの音楽が作られたと感ずるまで模索し続けます。

録音して客観的に聴いてみる練習法も効果的です。

そしてここからが本当の“話し合い”の始まりです。

どのように旋律を浮かび上がらせるか、ハーモニーを美しく響かせる最適なバランスはどれか、等々、「話し合う」→「弾いてみる」を納得がいくまで繰り返しましょう。

両手のバランスは「左手7:右手3」(セコンド)など、数字で楽譜に書き込んでおくのも良いですね。

練習しているときは、お互いをよく見ること！ 身体の位置、腕の位置、指の着地点など、視覚からの情報と耳からの情報が結びつくことで、思わぬ発見があり、音の引き出しがさらに増えるかもしれません。

指や身体の位置は

指が接近したり、腕が交差したりと、連弾では身体の移動も多いですね。エルボ(肘打ち)による打撲など、初めころは接触事故(?)がよく起きたものです。

そんなハプニングを防ぐためにも、

危険な箇所は楽譜に・・・

- ①お互いの手の位置 (上か下か)
- ②お互いの腕や身体の位置 (前か後ろか)

を細かく決めて書き込んでおきましょう。

また楽譜を置いて弾くときには、楽譜をめくるタイミングと、譜めくり担当(どちらがめくるか)もページごとに記しておく、演奏に支障をきたすことなくスムーズに演奏が進みます。

ズレを少なくするには

初めからあまりズレないというペアもいらっしゃると思いますが、私たちは呼吸の仕方から打鍵のタイミングに至るまで、違うところだらけでしたので、ぴたりと合うようになるまで試行錯誤の連続でした！

まずは、曲の冒頭やフレーズの出だし、そして曲の終わりをぴたりと揃えることから挑戦しましょう。

演奏に入る前に、お互いの性格(せっかちさんなのか、のんびりやささんなのか。私たちは、藤井がせっかちです)を知ることも必要ですね。

例えば「メトロノーム」=60」に合わせていても、ひとりひとり打鍵のタイミングは微妙に違うものです。

そこで、曲の出だしは、その曲の基となっている音価(8分の6拍子の曲でしたら8分音符)を、練習時にはメトロノームも使って2人で正

確に感じ、その曲をリードする方が小さな声で「♪♪♪=タンタンタン」と拍を数えてから、始めましょう。

さらに、指が鍵盤に落ちるその瞬間まで、目でもタイミングを計り、その一瞬をぴたりと合わせるコツをつかむまで、呼吸とともに何度も練習しましょう。

そして曲の終わりですが、演奏が終わって気が抜けるからか、何となく手をあげて終わり!というペアもたまに見受けられますが、例えば、フェルマータで終わる曲では、何音符分長くするのか、2人の指先は一緒に鍵盤から上がっているか、ペダルは手と一緒に上げるのか長めなのか、最後の最後までお2人のアンサンブルであることを忘れずに!

ここまでのことを踏まえた上で、アメリカの作曲家、ジョン・ジョージの連弾曲《森の花》をご紹介します。

多くのピアノ教材を残した彼の音楽は、抒情的で神秘的、特にハーモニーの美しさにはうっとりしてしまいます。彼のピュアな人間性が音楽からうかがえることと思います。

この曲を通して、層となって“見える”ハーモニーを2人で作り上げていきましょう。

文責：白水芳枝

ジョン・ジョージ《森の花》

ピティナ・ピアノステップ課題曲：
 応用2／収録楽譜：『森の夜明け』
 (全音楽譜出版社)